「ドイツ教育」の現在 第2回
ドイツにおける「戦後」教育

過去の歴史ゆえに自己嫌悪に陥ることなく、創造的批判精神を保ち続ける。――戦後のドイツ教育は、周到な制度によって、その持ち前の〝理性〟を貫いている。

小野フェラー雅美
著述家・翻訳家　長野県松本市生まれ。1976年上智大学外国語学部ドイツ語学科卒業。82年、ドイツ・ハイデルベルク大学政治学科並びに言語学・ドイツ文学学科修士号取得。現在、ベルギッシュ・グラットバッハ市在住。日本とドイツとの文化交流の場で、幅広い活躍をしている。

地域の人口統計を反映する外国人生徒数

ノルトライン・ウェストファーレン州1)にあるケルンで一番大きな、ハインリッヒ・ベル統合学校2)には今1575人の生徒が通う。そのうち30%が外国籍を持った生徒だ。ドイツ国籍だが両親とも他国由来の生徒を含めると、それが50～60%となる。なぜか？　それにはいくつかの理由がある。

ひとつには、ドイツには全人口の約9%の外国人が住んでいる、ということ。そして約8千2百万人の人口を持つドイツが、外国人労働者としての経済移民に加えて、過去15年間に百万人以上の戦争・政治避難民を受け入れてきたという事実3)。それにこの統合学校の地域的伝統的特異性と、学校の方針がある。ドイツで四番目に大きな都市ケルンでは、百万人の人口のうち約18%が外国人だ。地域によってその割合はもちろん異なり、この統合学校のある地域は、ケルンでも特にトルコ人（70%）を筆頭に旧ユーゴ、イランなどの国の人々が半数を占める。ドイツの五大都市における外国人の割合を見ると、上表のようになる4)。

都市名	人口	外国人人口	%
ベルリン	3,384,200	436,182	12.8
ハンブルク	1,710,932	268,766	15.7
ミュンヘン	1,260,597	287,107	22.8
ケルン	1,019,049	182,456	17.9
フランクフルト	619,443	171,174	27.6

この統合学校は、1917年にケルンに生まれ、72年にノーベル文学賞を受賞したハインリッヒ・ベルの名を持つ。ケルン大学でドイツ文学を学んだ彼は、47年に他の作家、批評家たちとともに「47年グループ」に参画し、国家社会主義（ナチズム）と第二次大戦の経験を根底におき、作家の社会的責務を前面に出した政治的文学活動を実践した。その実績により国際ペンクラブの会長も務め、政治的に迫害される作家への支援などで文学以外での評価も高い。ソルジェニーツィンのソ連出国の際、身元引受人となったのも彼だ。

その名を持つ同校は、政治避難民子弟を極力受け入れてきた。そのためケルンの外国人の70%がトルコ人のところ、同校のトルコ人生徒は50～60%と割合少ない。湾岸、アフガン、ユーゴ、ボスニア、イラク、スーダンと、世界情勢によってその都度同校に入ってくる難民子弟の由来は変わるのだ。

校長のゲルノー・クランプ氏の経歴を聞くと、なるほど、と思う。ヘッセン州出身の彼は実業学校5)を卒業後、電気技術師のゲゼレ試験を受け、マイスター6)の下で働いた。それに飽き足らず、別分野に一度入った人が専門・総合大学に進めるよう設置してある補修高等専門学校で学び、アビトゥーア（大学入学資格試験）を遅れて取得。ケルン大学でまず医学を専攻。大学紛争時代の政治活動を経て化学と生物に専攻を変えた。彼が国家試験を受けた頃、誰にでも門戸を開く新しい教育論が盛んだった。労働者子弟にも同じチャンスを与える、社会的意識の高い統合学校が次々に設立された。彼はそれに同調し、別の統合学校で5年の教師生活の後、校長職のための特別研修を受けた。校長として最初に赴任したのがこのハインリッヒ・ベル統合学校であり、そしてここで定年を迎えようとしている。

そういう背景のある学校と校長なので、文化背景の差による問題把握の違いには心を配る。「当校の生徒が5年、7年、9年後にそれぞれの終了資格を取って卒業するまでに、どういう人間になる下地を身につけてほしいとお思いですか？」という質問に対する彼の答えは、次の三点だった。

1、自主性のある人間
2、自分自身と自分のいる環境に対して責任が持てる人間
3、自分とその環境に満足できる人間（運命に甘んじる満足ではなく、野心をもって自分の才能を適所に生かしてゆくことによって見いだす満足）

ドイツの「戦後」教育

ユダヤ人であることのみを理由に、東京の人口の4分の3にも当たるユダヤ人を殺戮したドイツの過去は、何千年たっても世界史の中から消えることはないであろう。そしてそれは、戦後事あるごとに繰り返された公の謝罪や毎年の弁償などでは癒されえない、後ろめたい傷でもある。アメリカにもイギリスにもフランスにも、他のどの国にも右翼グループはたくさんあるが、ドイツに少しでもそういう動きが見られると、世界のマスコミはこぞってドイツのネオナチについて報道する。

東西統一もなり、EUの中心となってヨーロッパを通じ世界の政治に影響を与えはじめているドイツ。その歴史的政治的環境の中で、戦争体験のない親に育てられる世代の子どもたちに、自己嫌悪に陥ることなく批判精神を保たせるため、ドイツの教育は戦後50年以上の間に何を行ってきたのだろう？

ハインリッヒ・ベル統合学校の指導要領では歴史、地理、政治、宗教、国語を主体としたいずれかの教科で、全生徒が在学中に必ず次のケルン市内にある各所を見学することになっている。

- 1935年から45年までケルンのゲシュタポの中枢であったLDハウス。今は博物館としてかつての牢獄の中にナチ時代のドキュメントが展示されている。
- ポーランドからの強制労働者が眠るケルン西墓地
- 42年以来ブーヘンヴァルト強制収容所に送られる前にユダヤ人、社会・共産主義者、同性愛者、ジプシーらが集められたケルン見本市会場
- ケルン、エーレンフェルト地区にある「エーデルワイスの義賊」と呼ばれるレジスタンス運動跡。ヒットラーユーゲントに加わらなかった何千人という若者がゲシュタポ中枢を襲う計画を立てたが発覚し、加担した16歳を含

ノーベル文学賞受賞者ハインリッヒ・ベルに関する校内展示は大へん充実している。
撮影／津田孝二

1）ノルトライン・ウェストファーレン州はドイツで一番人口の多い州。州都はデュッセルドルフ。
2）統合学校：5-9年制。基幹学校、実業学校、ギムナジウムがひとつに統合されたもの。9月号参照。
3）フィッシャー世界統計2004（2000年の統計）、ドイツの避難民
4）ドイツの大都市における外国人 Isoplan　2001年12月の統計
5）実業学校：小学校5年から高校1年相当の6年制の学校。9月号参照。

む6人の未成年者と大人7人が、拷問され、裁判なしに絞首刑にされた場所。その後同じ広場で、反乱を起こしたポーランド人強制労働者も吊るされた。

それに加えて10年生（高1）か11年生で、修学旅行先としてポーランドの強制収容所があり、年1回のプロジェクト週間に、ポーランドの学校との交換もある。もちろん予めそれぞれのテーマについてさまざまな教科で自由研究、グループ研究などの形で準備することは言うまでもない。

ナチズム台頭の推移と結果を特別取り上げるのは、このハインリッヒ・ベル統合学校に限らない。歴史の時間では、9年生（中3）と10年生（高1）でワイマール共和国時代から現代までを扱うことが、州の指導要領で必修とされている。太古から現代を時代順に教え、ワイマール以降には時間を割けない、ということはありえない。各教科書でも、「侵略戦争」という言葉は戦後すぐに使われ始めた。

9月号で紹介したニコラウス・クザーヌス・ギムナジウム7)では、外国人生徒の割合は他のギムナジウム同様5％以下とかなり少ないのだが、1年を通して「なぜ第二次大戦に至ったか、そしてそれがどういう戦争であったか」をほとんどの学科を通じて学ぶ。同校では1月27日は組織的ユダヤ人迫害が始まった日として、5月5日は無条件降伏の日として、年2回それまでの経過を含め、学年にあわせた特別授業を行っている。アウシュヴィッツを生きのびたポーランド人にその体験を、生徒の祖父母の世代に個人的終戦体験を語ってもらったり、『エーデルワイスの義賊』のドキュメンタリー映画上映や、政治活動を続ける小説家のリーディング、学校の演劇部による『アンネの日記』などのテーマ劇上演などをイベントとする。それと別に年1回のプロジェクト週間でもいくつかそのテーマを扱う。そのため当校は、過去2回連続して、市の外国人評議員会8)主催の「極右反対の学校プロジェクト」で表彰されている。

まとめれば、どういう形態の学校でも、過去を過去として自覚的に認め、自分と自分のいる現在、未来の環境に責任をもち、確かな判断をしながら、個性を生かせる分野で自主的に社会参加してゆく人間づくりを目的としている。

毎日の授業の中の「戦後」教育の具体例

さて、授業ではそれがどこに出てきているだろう？　具体例をあげてみたい。

ニコラウス・クザーヌス・ギムナジウムで国語と地理を教える教師エーリヒ夫人の授業を見てみよう。今年度、先生は9年生（中3）2クラス、10年生1クラスと、12、13年のアビトゥーア準備コースをそれぞれ1コースを持ち、10年b組の担任をしている。9月号の英語のB先生と同様、彼女の評価は厳しく、1はほとんどもらえないが、学ぶ意志のある生徒は彼女のアビトゥーア準備コースに殺到する。政治活動をしているわけではないエーリヒ先生。1年間の国語の授業では過去の問題をどこで扱っているだろう？　当校9年生の国語科指導要領全文を引用する。傍線部分が、先生が個人的に第三帝国を扱う箇所。「原典」というのは抜粋でなく全作品を意味する。

全学年を通しての国語科の大きなテーマ

1、書く、話す
2、原典把握
3、言葉の反映

9年生（中3）国語必修テーマ

Ⅰ、戯曲原典の分析（例：ツックマイヤー「ケーペニックの大尉」）と、物語風作品原典の分析（例：デュレンマット「裁判官とその執行人」、ドロステ・ヒュルツホフ「ユダヤ人のぶなの木」）
Ⅱ、叙情原典の解釈（中世から現代まで）
Ⅲ、論証する

指導内容

1、叙情作品原典に親しむ
・「愛」について（州指導要領参照）
・「歴史」と対決する人間（州指導要領参照）

6）マイスターとは、ドイツ国家で法制化されている最高位の職人の名称とその育成制度。ゲゼル試験はマイスター試験の前提である。
7）15世紀に生きたドイツの哲学者、神学者、数学者、枢機卿の名をもつ古典語系ギムナジウム。9月号参照。

エーリヒ先生の授業は厳格だが、やる気のある生徒は彼女の授業コースに殺到する。

2、虚構作品原典に親しむ
・複雑な物語風の作品原典の理解
追加例：シラー「犯罪者」、クライスト「チリ地震」
・「権利と正義」について（州指導要領参照）
3、マスメディアについて
(1)マスメディアで使われる文章における情報伝達と世論形成分析
同じ内容を扱った国内外の記事の視点比較（州指導要領参照）
(1)映画制作プロジェクト
例：広告映画制作
4、話す、書く
・職業選択（州指導要領参照）
職業安定所パンフレット、願書書類9)
5、話す、書く
・討議：主張、論証。例：フリースピーチ、自分で書いた文章を基にしたスピーチ
6、虚構作品原典の読み方
・戯曲作品原典の構造と前提の把握
追加例：フリッシュ「アンドラ」、デュレンマット「貴婦人故郷に帰る」、ブレヒト「第三帝国の恐怖と貧困」
7、言葉の反映
・言葉の規格と推移変化がもつ問題（州指導要領参照）

なお、構造として独特なのは、この学科別指導要領も含めた学科担当教師会議（年2回）には、選ばれた保護者代表が参加して意見を反映できることである。

次は、音楽の授業での例。シュテュンプケ先生は9年生クラスの授業で、「政治的な音楽」と題し現代ポップスの諸ジャンルを、9月号で紹介した音楽授業の要領で挙げさせ、グループで分析、発表させた。ソングテクスト分析の中で各グループは、カース「何故だめ？」（小市民的無批判な生活批判）、スコルピオン〝Wind of Change〟（冷戦時代の反戦歌）、ブルーメントップ「ダンケ、ブッシュ」（ブッシュ政権とそれに追従する現ドイツ野党党首へのアイロニカルな批判）、エルツテ「愛への叫び」（暴力と右翼ソンググループへの批判）などを発表。ヒップホップテクストには特に右傾化した内容のものが多い、と結論を出した。

学校主導の教育のほかに、生徒の自主的活動もある。ユーゴ危機の際、当校7年生（中1）クラスの女の子たちは、木曜の夜自分たちで焼いたケーキを持ち寄り、金曜の休み時間に校内でそれを売ったお金をボスニア基金に寄付したのが一例だ。もちろん当時の女性校長は前日にそのアイディアに許可を出していたのだが。

次号で扱うが、カリキュラムの約3分の1を外国語が占めるということも大切な点だ。国際環境に生きる現在、そして歴史的に他国との軋轢を経験し続けてきたドイツが、30％以上の時間を割いて他国との直接のコミュニケーションに力をいれている、ということは忘れてはならないと思う。

第二次大戦後、周辺各国との地方自治体単位での姉妹都市関係を一部法制化し、交換留学制度も含め都市ぐるみの交流関係を半世紀以上促進し続けてきた教育管理機関のあるドイツ。ワールドカップ以来韓国熱が持続している日本に、それがよい方向に向かうようサポートする体制はできているのだろうか？　その「戦後」教育に、原爆の被害者としての目だけではなく、自国の過去を冷静に見つめた上で現在・未来を判断する目を養う。今回扱った意味でのそうした政治制度的サポートがあっただろうか？

●11月号につづく

8）ノルトライン・ウェストファーレン州他多数の州では外国籍を持った住民が5000人を超える市町村は公選により同会を設置することが法制化され（同州「市町村に関する法規」第27条）、同会は市町村の運営の中での外国人住民のための提言を議会に行う。
9）このクラスは前年に願書を書く授業を履修している。同クラスの仮面接については9月号参照。